4.質の高い教育をみんなに

博士人材育成に向けた研究環境・キャリア支援の推進

慶應義塾は国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）博士後期課程学生支援プロジェクトの「次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）」と「国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）次世代AI人材育成プログラム」に採択されており、博士後期課程学生が研究に打ち込める環境整備を進めています。

博士後期課程学生支援

- Keio-SPRING「未来のコモンセンスをつくる博士人材の育成」
  日本の科学技術・イノベーションの将来を担う優秀な志ある博士後期課程学生を育成することを目的とし、研究費および生活費相当額を補助しています。分野を問わず、真摯に自らの研究課題に取り組む環境を整えるとともに、多様なキャリアパスにおいて活躍するために求められる能力を育成する機会（キャリア開発・育成コンテンツ）を提供し、意欲ある博士後期課程学生の挑戦的・融合的な研究活動を支援しています。
- Keio-BOOST「未来のコモンセンスをつくる国際的 AI 先導人材の育成」
  次世代 AI 分野の発展に資する研究開発に取り組む博士後期課程学生の人材育成および先端的研究開発の推進を目的とし、研究費および生活費相当額を補助するとともに、大学や研究室の枠を超えた活動を通して専門性を高める機会を提供しています。

プロジェクト名	支援期間	支給額	採用人数
Keio-SPRING「未来のコモンセンスをつくる博士人材の育成」	最大3年間（4年制の場合は最大4年間） ※最短修業年限を上限	生活費相当額（年間220万円）および研究費（年間30万円）	144名（2025年度新規選抜実績）
Keio-BOOST「未来のコモンセンスをつくる国際的 AI 先導人材の育成」	最長3年間（4年制の場合は最大4年間） ※最短修業年限を上限	生活費相当額（年間360万円）および研究費（年間30万円）	10名（2025年度新規選抜実績）

2025年自然科学研究教育センター・シンポジウム「話そう、考えよう、SDGsと科学のこと」開催

2025年11月15日、日吉キャンパスにて、自然科学研究教育センター主催シンポジウム「話そう、考えよう、SDGsと科学のこと」を開催し、約40名が参加しました。本シンポジウムは、2030年までの達成を目指すSDGsに、科学技術がどのように貢献できるのかを参加者と共に考えることを目的に、SDGs関連分野の第一線で活躍する4名をお迎えして講演を行いました。

大沼あゆみ経済学部教授は、技術や生産物が市場に普及する仕組みを具体例と共に解説し、地球環境を支える経済の役割を示しました。続いて、Jリーフ株式会社の上原淳氏は、レタスの植物工場の現状と展望を紹介し、持続可能な食料調達の可能性を示しました。千代田化工建設株式会社の今川健一氏は、次世代エネルギーとして期待される水素の利活用について、コスト面も含めた展望を説明しました。最後に、清水建設株式会社の鵜山尚大氏より、月面太陽光発電「ルナリング」構想と月面建設技術を通じた将来のエネルギー供給の可能性が語られました。

講演後、総合質疑討論が行われました。登壇者と参加者が、2030年以降を見据えて、科学技術の未来像を具体的に構想し、共有する有意義な機会となりました。



銀杏並木とシンポジウムポスター



総合質疑討論の様子

Hヴィレッジに双子のヤギが入寮―学生主導のヤギプロジェクト―

湘南藤沢キャンパス（SFC）内学生寮「H（イータ）ヴィレッジ」に、双子のヤギ「カイくん」と「マユちゃん」が入寮しました。

本取り組みは、寮生が立ち上げた「ヤギプロジェクト」によるものです。外来種の雑草処理に苦慮していた寮父との会話をきっかけに、雑草を好んで食べるヤギの習性を活かした自然な力による除草の可能性に着目し、企画されました。ヤギの誘致のほか、クラウドファンディング、ヤギ小屋の建設も学生自らが手掛けました。

2頭はHヴィレッジ隣接地での除草を担います。ヤギによる除草は、化学除草剤を用いずに自然の力を活用する方法であり、生態系や土壌の保全にもつながる取り組みとして期待されています。


カイくんとマユちゃん

第24回「森を愛する人々の集い」開催

慶應義塾は、現在全国に義塾所有山林や国有林分収契約山林をあわせ約160ヘクタールにおよぶ山林を保有し、植林・育林活動を行っています。これらの活動を支援する目的で2001年に発足した「福澤育林友の会」主催による「森を愛する人々の集い」が、2025年6月14日に三田キャンパスにて開催されました。当日は同会の会員や学生など、約70名が参加しました。

24回目を迎えた今回は、一ノ瀬友博環境情報学部長が「南三陸慶應の森の自然環境と生物相」と題して登壇しました。講演では、バイオマスや農業、資源循環といった多様な視点から、環境課題の解決を目指す研究や活動が紹介されました。また、大学院生によるポスターセッションも実施され、志津川山林の自然環境と生物相について、活発な意見交換が行われました。



一ノ瀬環境情報学部長による講演

湘南藤沢キャンパス（SFC）2025年度キックオフレクチャー開催

2025年4月7日、湘南藤沢キャンパス（SFC）にて、新入生・在学生を対象に、学問に取り組む姿勢や社会の変化を捉える視点を養うことを目的としたキックオフレクチャーを開催しました。

2025年度は、一般社団法人エシカル協会代表理事の末吉里花氏に「これからの時代に必要なエシカルという“ものさし”」をテーマにご講演いただきました。末吉氏は、自身の経験を踏まえながら、エシカルの考え方や日常で実践できる行動について紹介しました。質疑応答では、学生からエシカルを自分事として捉える方法など多くの質問が寄せられ、持続可能な社会に向けた意識を深める機会となりました。



末吉氏による講演

「協生ステーションarcoíris」開設

慶應義塾は、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）を尊重する環境を整え、一人ひとりが互いに助け合い、理解を深めながら協生社会を先導していくことを目指す「Pride Commitment」の一環として、2025年6月に「協生ステーションarcoíris（アルコイリス）」を開設しました。

「協生ステーションarcoíris」は、ジェンダー、セクシュアリティ、障害、人種、文化など、私たちの間に存在する様々な違いを“違い”ではなく、“個性”として尊重し、理解しあうことを目指す情報発信と交流の場です。学生および教職員が誰でも安心して利用できる安心・安全な空間として、静かに読書や勉強に集中したい時の利用のほか、話したいことや相談したいことがある時には、コーディネーターと対話することも可能です。

名称の「arcoíris」はスペイン語で「虹」を指し、希望や未来、多様性、架け橋といったポジティブな意味を持っています。異なる色が調和して一つの美しい虹を成すように、多様な個性が共に生き、響きあう社会の実現に向けて、「協生ステーションarcoíris」は、学生・教職員にとっての居場所となることを目指しています。

主な取り組みとして、ジェンダーやセクシュアリティ、生活、キャリア、就職・就労に関する個別相談を受け付け、相談者が安心して思いを話せる機会を提供しています。また、DEI推進の拠点として、学内の関連組織や各種相談窓口と連携し、全学的な支援体制の構築を進めています。さらに、誰もが安心して過ごせるキャンパスを目指し、学内の環境や制度のバリアフリー化を推進するとともに、「協生環境推進ウィーク」などを通じた啓発・情報発信、ワークショップや勉強会の開催にも取り組んでいます。

慶應義塾は、「協生ステーションarcoíris」を通じて、多様性を尊重する文化のさらなる醸成に努めていきます。



協生ステーションarcoíris



安心して過ごせるようにパーテーションで区切られたブース

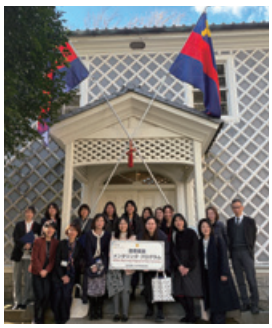
多様な利用者に応える大学図書館を目指し、第22回メディアセンター研修会を開催

メディアセンターでは、2025年11月21日、「どうすればよい?大学図書館の『合理的』配慮 ～多様な利用者と状況に応えるために～」をテーマに、第22回メディアセンター研修会を開催しました。本研修会は、メディアセンター職員をはじめ、関心を持つ教職員が参加できる機会として企画されました。

2024年4月に改正障害者差別解消法が施行され、大学を含むすべての事業者において合理的配慮の提供が義務化されました。これにより、学内の事務部門や教育・研究支援の現場において、障害のある学生・教職員を含む多様な利用者への対応の重要性が一層高まっています。大学図書館であるメディアセンターにおいても、図書館サービスの提供や職場環境の整備において、合理的配慮をどのように理解し、実践していくかが重要な課題となっています。

本研修会では、「改正障害者差別解消法や読書バリアフリー法を踏まえた大学図書館の役割」、「障害のある学生への合理的配慮と多層的な支援」、「誰もが安心して力を発揮できる職場づくり」をテーマに、専門家による講演が行われました。法制度に関する知識をアップデートするとともに、大学としての合理的配慮に関する課題や捉え方を学び、大学図書館の現場対応や職場環境を中心に、「どのように考え、どのような備えをするべきか」を改めて考える機会となりました。

職員メンタリング・プログラムの実施


職員メンタリング・プログラム修了式

2022年度より実施している「教員メンタリング・プログラム」の成果を踏まえ、2025年度秋に「職員」向けのメンタリング・プログラムを試行的に実施しました。

本プログラムは、慶應義塾も加盟しているAPRU（The Association of Pacific Rim Universities:環太平洋大学協会）の「Asia-Pacific Women in Leadership（APWiL） Mentoring Program」の特徴やノウハウを取り入れたものです。メンターとメンティーが双方に学び合い、教え合うことで、慶應義塾の草創期からの精神の一つである「半学半教」の実践を目指しています。

多様な部署や世代の職員が、メンター・メンティーとして対話を重ねたほか、他大学見学会などのワークショップを通じて交流を深め、お互いのキャリアや業務に対する視野を広げる契機となりました。

2026年度からは正式なプログラムとして始動する予定です。

「Girls Meet STEM at 慶應理工2025:女子中高生のためのキャンパスツアーと座談会」開催

2025年8月1日、理工学部は、女子中高生を対象としたキャンパスツアーおよび座談会「Girls Meet STEM at 慶應理工2025:女子中高生のためのキャンパスツアーと座談会」を矢上キャンパスで開催し、中高生と保護者あわせて41名が参加しました。

理工学部では「創発」を基本理念に、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）を重視した教育・研究環境づくりを進めています。本イベントは、理工系分野に関心を持つ女子生徒に最先端の環境とリアルなキャンパスライフを体感してもらい、将来の選択肢を広げることを目的に実施しています。

当日は、イノベーション施設「Yagami Innovation Laboratory（YIL）」や「共同実験室」、「量子コンピューティングセンター」、「マニュファクチュアリングセンター」などの見学を通じて、理工学部における最先端の研究・教育環境への理解を深めました。また、在学生との座談会では、研究や留学、サークル活動などに関する活発な質疑応答が行われ、参加者が理工系分野での学びや将来の進路に期待を膨らませる場となりました。


共同実験室の見学


座談会の様子

米国AHEAD有識者招聘特別企画を共催

2025年10月17日、AHEAD JAPAN（一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会）主催の米国AHEAD有識者招聘特別企画に、協生環境推進室が共催として参画しました。改正障害者差別解消法の施行に伴い、障害学生支援が新たな局面を迎える中、本企画は、障害のある学生の学修や生活をより充実させるとともに、社会人への移行を支える取り組みを強化し、日本の高等教育における障害学生支援の発展に貢献することを目指して実施されました。

当日は、米国で50年にわたり積み重ねられてきた障害学生支援の経験や実践について、講演やトークセッションを通じた共有が行われました。支援のコーディネートにおいて重要となる概念や考え方、実務のあり方を学び、今後の高等教育における障害学生支援の充実に向けた実践的な示唆を得ました。

体験型ワークショップ「未来の介護テクノロジーを考えよう!」を開催

2025年8月6日、殿町タウンキャンパスは、世界最先端の研究開発拠点キングスカイフロントにおいて開催された小学生対象の体験型イベント「第11回 キングスカイフロント夏の科学イベント2025」に参画し、企業4社との協働により、小学校高学年向けワークショップ「未来の介護テクノロジーを考えよう!」を実施しました。参加した児童は、ゲームを通して身体動作を読み取るセンサー技術、血液中の物質を外から測定する技術、脳からの指令として出る微弱な生体信号をキャッチすることで病気やけがによる歩行困難者が意思にあわせて動くことのできる技術、歯の神経を再生させ健康な歯に戻す歯髄再生治療技術、眼鏡に映像を映すことで長時間のテレビやパソコンの視聴が困難な高齢者や身体の不自由な人も楽しむことができる技術などの最先端テクノロジーを体験し、発見した課題の解決に向けたアイデアを提案しました。

シンポジウム「パブリックヘルス（公衆衛生）の現代的課題を考える」開催

2025年7月1日、三田キャンパスにて、X Dignityセンター主催シンポジウム「パブリックヘルスの現代的課題を考える」を開催し、産業界、官公庁、学術機関、民間団体など多様なセクターから90名を超える参加者が集まりました。シンポジウムでは、SNS利用が子どもの心身の健康に与える影響や国内外における規制・法的紛争の現状、地球環境と人間の健康を一体的に捉える「プラネタリーヘルス」をテーマに、研究者、行政関係者、医療・政策分野の専門家が意見を交わしました。分野を超えた対話を通じて、健康、情報環境、地球環境をめぐる課題に対し、領域横断的な連携を深める重要性を共有する機会となりました。

「協生環境推進ウィーク2025」開催

2025年11月28日～12月16日、「協生環境推進ウィーク2025」を開催しました。本企画は、慶應義塾における協生環境の実現に向けて、協生環境推進室が取り組む「ワーク・ライフ・バランス」、「バリアフリー」、「ダイバーシティ」、「コミュニティ・エンゲージメント」の4つの活動をテーマに、生徒・学生・教職員をはじめとする参加者が多様性への理解を深め、誰もが安心して学び、働き、生活できる環境づくりについて考える機会として実施したものです。期間中は、講演会やセミナーなど全6企画を開催しました。

11月28日の「ジェンダー・セクシュアリティ論公開講座」では、LGBTQA+の若者の調査から見えてきた課題を取り上げました。大規模調査を基に、いじめや孤立、社会的偏見がメンタルヘルスに及ぼす影響や、友人・仲間、居場所、性的マイノリティーを理解し支援するアライ（Ally）の活動、いじめ防止の仕組みといった「つながり」が若者のウェルビーイングを支える重要な力となることを共有しました。12月2日には、「“性”の多様性」をテーマに、多様な背景を有する人々が互いの尊厳を尊重し合う社会のあり方について学びを深めました。さらに12月5日には、肉乃小路ニクヨ氏を迎えたトークショーを開催し、自分の頭で考え、言葉にしながら自分らしい人生を築くことの大切さについて考える機会としました。

また、ワーク・ライフ・バランスの観点から、12月11日にKINDプログラム・介護セミナー「仕事と介護を両立させる秘訣～介護は突然やってくる、その時に慌てないために～」を開催し、介護の事前準備、介護保険サービスの利用法、仕事と介護を両立させるポイントなどについて専門家から学びました。12月12日開催のCAREセミナー「自己表現ができる!アサーションスキルを学ぼう」では、自分も相手も大切にするコミュニケーション手法や、心理的安全性のある職場づくり、人間関係の形成について理解を深めました。

最終日となる12月16日には、日本初のオストメイトモデルであり医師でもあるエマ・大辻・ピックルス氏による講演「アカペラを生きる～人工肛門と私の人生リスタート～」を開催し、難病との闘いやストーマ（人工肛門）造設の経験を伺いました。障害や疾病の有無にかかわらず、自分らしく生きること、多様な身体や生き方を尊重することの意義を考える機会となりました。



エマ・大辻・ピックルス氏講演

薬学部長主催特別講演会「世界の創薬の現状と日本の課題―産業からの視点―」開催

2025年6月4日、芝共立キャンパスにて、中外製薬株式会社名誉会長（元代表取締役社長）・慶應義塾評議員の永山治氏をお迎えし、薬学部長主催特別講演会「世界の創薬の現状と日本の課題―産業からの視点―」を開催しました。

講演では、永山氏から世界の創薬の現状と日本の医薬品産業の課題、それに対する中外製薬株式会社の取り組みが紹介され、学生・教職員ら115名が熱心に耳を傾けました。続くROUND TABLE DISCUSSION「不確実な時代を生き抜くために、今何をすべきか?」では、キャリアや研究の意義について活発な意見交換が行われました。


講演する永山氏

2025年度藤沢市民講座「誰もが自分らしく暮らせるまちへ:藤沢発・共生社会のつくり方―看護医療学部開設25周年に向けて―」開催

2025年11月、湘南藤沢キャンパス（SFC）にて、2025年度藤沢市民講座を開催しました。本講座では、「医療的ケア児や障害のある方、自宅療養者が地域で暮らし続けるための支援」、「孤独・孤立の予防に向けて善行団地を舞台に看護学と社会学の視点から進められてきた地域参加型研究（CBPR）」、「地域福祉の視点から『社会的つながり』がもたらす影響」などを全3回にわたって取り上げました。藤沢市や地域の福祉・看護関係者と共に、誰もが自分らしく暮らせる協生社会の実現に向けて連携して取り組む意義を考える機会となりました。

市民公開講座「がんの薬物治療はここまで進化した!最新のがん薬物治療 ～がんになる前に、なった後も知っておきたいこと～」開催

2026年1月18日～1月25日、薬学部は市民公開講座「がんの薬物治療はここまで進化した!最新のがん薬物治療 ～がんになる前に、なった後も知っておきたいこと～」をオンデマンド配信にて開催しました。本講座では、がん研究会有明病院院長補佐・薬剤部長の山口正和氏を講師にお迎えし、最新のがん薬物療法の現状と、治療効果を高めるうえで重要となる早期発見につながるがん検診の意義について取り上げました。最新の医療知識を深め、自身や家族の健康管理について考える機会となりました。

ワークショップ「最先端の医療機器でリアルな医療体験を!」開催

2025年8月2日、予防医療センターにて、第2回「最先端の医療機器でリアルな医療体験を!」ワークショップを開催しました。本取り組みは、医学的知見を社会に還元し子どもたちに学びの場を提供することを目的に、麻布台ヒルズが実施するサマープログラム「ヒルズ・ワークショップ フォー・キッズ 2025」の一環として開催されたものです。昨年に引き続き、中学生を対象に本物の医療機器に触れる体験学習の機会を提供しました。

当日は、医師や看護師、技師に加え、医療系学部生の救命救急措置法普及活動サークル「KAPPA（Keio ACLS Popularizing and Promoting Association）」所属学生の指導の下、内視鏡検査、超音波検査、一次救命処置（AED等）の体験学習を行いました。参加した中学生からは「医療への興味がとても湧いた」「AEDの実際の使い方が学べて良い機会になった」といった声が寄せられました。

予防医療センターでは、今後も健康や医療への理解を深める次世代教育活動を継続していきます。



胸骨圧迫とAEDによる一次救命処置の実践

塾生会議プロジェクトの活動

塾生会議から提出された提言の中から審査を経て採択されたものは、学生が主体となる「塾生会議プロジェクト」として具体化され、様々な活動へと発展していきます。

慶應生と日吉の街の交流プロジェクト

SDGsゴール11「住み続けられるまちづくりを」の実現のため、慶應義塾が地域社会で果たすべき役割を学生と地域住民の交流を通じて考えながら、「近くて遠い慶應義塾大学」から「街の誇りの慶應義塾大学」へと変革していくことを目指すプロジェクトです。日吉キャンパス近隣の小学生を対象としたイベントや地域行事への参加を通して、学生と地域住民が自然に交流できる機会を創出します。

2025年11月と2026年2月、小学校1・2年生を対象とした「大学生ブックキャラバン」を実施し、それぞれ50～60名が参加しました。本企画は、慶應義塾の学生がキャンパス近隣の小学校や学童を訪問し、本をテーマにしたワークショップを実施することで、本や大学を身近に感じてもらうことを目的としています。11月は、絵本の読み聞かせを通してSDGsについて学んだ後、小学生がSDGs達成のために自分ができる行動を考え、絵で表現する「SDGsカレンダーづくり」を実施しました。2月には、SDGsをテーマにしたカルタを通して学んだ後、子どもたちが学んだ内容の中から伝えたいことをクイズにする「SDGsカルタ&クイズ大会」を実施しました。SDGsカルタは放課後キッズクラブおよび日吉台小学校へ寄贈し、イベント後も多くの子どもが継続してSDGsについて楽しく学べる環境づくりを目指しました。

2025年8月には、普通部通りで開催された夏祭りに学生スタッフとして参加しました。当日は、SDGsに関するクイズを掲示したブースを設置し、正解者がスタンプを押すSDGsスタンプラリーの台紙を印刷したうちわの配布を行いました。祭りを楽しみながらSDGsについて学ぶ機会となっただけでなく、地域住民が主体となって開催する行事に慶應義塾の学生が参加することで、地域と学生の交流機会にもなりました。



SDGsカルタで遊ぶ児童



クイズ発表の様子

春季企画展「ある一家の近代と戦争―上原良春・龍男・良司とその家族」を開催

2025年6月19日～8月30日、福澤諭吉記念慶應義塾史展示館にて、2025年度春季企画展「ある一家の近代と戦争―上原良春・龍男・良司とその家族」を開催しました。本展では、慶應義塾に学び、戦争で命を落とした上原良春・龍男・良司の三兄弟の足跡を中心に、上原家に残された遺品や写真、手紙などの資料を通じて、日本の近代化と戦争について考える機会を提供しました。戦後80年を迎える中、残された資料を通じて戦争の記憶を次世代へ継承することを目指した企画です。また、2025年7月12日には特別座談会「上原家、80年後の証言」を開催しました。上原家のご家族や関係者を迎え、三兄弟と共に過ごした日々や、戦争によって一変した家族の姿、平和への思いが語られました。企画展と座談会を通じて、来場者が戦争の記憶と向き合い、平和の大切さを改めて考える貴重な機会となりました。



熱心に鑑賞する来場者

「慶應義塾と戦争―モノから人へ―」大阪特別企画展を開催

2025年7月10日～8月31日、慶應大阪シティキャンパスにて、大阪特別企画展Ⅲ「慶應義塾と戦争―モノから人へ―」を開催しました。戦後80年を迎え、戦争を実体験として語ることのできる人が少なくなる中、慶應義塾福澤研究センターでは、2013年より「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトを発足し、戦争期の慶應義塾に関する資料の収集や所在把握を継続して行っています。本企画展では、昨年三田キャンパスで開催された企画展のダイジェスト版に加え、大阪会場のみで公開される新資料も展示しました。残された資料を通じて、戦争の記憶を次世代へどのように受け継ぎ、過去から何を学ぶことができるのかを考える機会となりました。



戦争の記憶を伝える当時の資料

国際刑事裁判所（ICC）・慶應義塾大学主催 アジア太平洋学術フォーラムを開催

2025年11月27日～28日、「ICCアジア太平洋学術フォーラム（ICC Asia-Pacific Academic Forum）」を三田キャンパスにて開催しました。本フォーラムは、ICCとMoU（基本合意書）を通じてパートナーシップを締結しているアジア太平洋地域の10大学が一堂に会する初の試みです。会場では、ICCが直面している危機的状況において、国や地域を超えて国際司法の一翼を担う本枠組みの重要性が確認されたほか、ICCへの学術的理解の促進や将来の学術協力のあり方が議論されました。この開かれた学術交流を通じて、今後ICCの任務に関する対話が促進され、国際刑事司法の発展に向けた地域の関与がさらに強化されることが期待されます。



オープニングセッションの様子

教職課程センター公開研究会「世界の子ども達に等しい教育の機会を」開催

2025年9月20日、教職課程センターは、慶應義塾の卒業生で、UNICEFや世界銀行をはじめとする国際機関で教育コンサルタントを長年務めてこられた野呂（中島）朋子氏をお迎えして、オンラインで公開研究会「世界の子ども達に等しい教育の機会を」を開催しました。野呂（中島）氏からは、数々の障壁によって子どもたちが安心して学校に通うことが難しくなっているウガンダの事例を中心に話題提供をしていただきました。教職課程を履修している学生たちと共に、今日不登校が増加している日本でも問われている「なぜ学校に通わないといけないのか?」という子どもの視点からの問いを、普遍性と地域性の両面から改めて深く検討する貴重な機会となりました。

慶應義塾図書館所蔵「論語疏 巻第六」が国宝に指定

2026年3月、文化審議会の答申が出され、慶應義塾図書館所蔵の「論語疏 巻第六」が、重要文化財指定から1年を経て、年内に国宝に指定されることが決まりました。本資料は、中国南北朝末から隋時代の6世紀頃の写本とみられ、『論語』の紙の伝世写本としては世界最古とされる貴重な典籍です。慶應義塾では、「慶應義塾大学論語疏研究会」を組織し、部局の枠を越えて調査・研究を進めてきたほか、早稲田大学等の協力も得て検証を重ねてきました。今回の国宝指定は、慶應義塾が培ってきた学術研究と、文化財保存・発信に向けた取り組みが結実したものです。今後も、世界的に価値ある学術・文化遺産の適切な保存と公開・活用に努めていきます。



「論語疏 巻第六」